西洋史

前野弘志

西洋史からは、堀井健一氏が「前四一一年アテナイの寡頭派政変と民主政復興」と題して発表された。氏は、従来から一貫してアテーナイの寡頭政研究に取り組んでこられた。今回の報告では、アテー

ナイ内部からの民主政存亡の危機である前四一一年の寡頭派政変を、前古典期及び古典期におけるポリスからアレクサンドロス及びローマの世界帝国へと移行する主要な国家形態の変遷の中に、ポリス的な政治運営の機構、言い替えれば、素人による政治運営の機構から専門家集団（テクノクラート）による政治運営の機構への変態の先駆的な実験として捉えようと試みられた。

氏の論旨は、概ね以下の通りである。まず、アテーナイの歴史の中で民主政が転覆したのは、前四一一年と前四〇四年の二回であるが、そのうち後者はペロポネーソス戦争敗北後にスパルタに強制された政体であったのに対して、前者はアテーナイ内部からの政体変更であった。この点から、前四一一年の民主政転覆こそ真の意味においてアテーナイ民主政の危機であったと規定し、前四一一年の政変を前四一五年に始まるシケリア遠征から前四〇四年のペロポネーソス戦争終結までの歴史的背景の中において性格付けされた。四百人寡頭派のうち史料的に追跡可能な四人、ペイサンドロス、アンティフォーン、フリュニコス、テーラメネースについてそれぞれの経歴を分析してみると、ペイサンドロスとアンティフォーンが寡頭派であったとしても、フリュニコスとテーラメネースが寡頭派であったとは言い難い。このことから、政変は純粋な寡頭主義から生まれた寡頭派政変ではなかったと主張される。従って、そのような寡頭派政変の原因も、政治理念的な闘争からの解釈よりも、むしろ政変当時にアテーナイの置かれていた財政的危機及び税徴収機構からの解釈が妥当であると指摘された。即ち、当時のアテーナイは、シケリア遠征失敗により艦隊と資金を使い果たし、またデロス同盟からの貢納金も相次ぐ同盟諸市離反のために事実上徴収不能となっていた。こう言った状況に直面して、アテーナイでは即時停戦か戦争続行かの論議が沸き立ったが、結局は戦争続行が決議された。一方、膨大な資金の不足分を補っていたのが、アテーナイの富裕者たちであった。彼等は、レイトゥールギア（対国家奉仕）及びエイスフォラ（臨時財産税）を課され、一度戦争となれば、常に大きな財政負担を強いられていたのである。以上のような状況を踏まえて、富裕者たちが民衆の意のままにこれ以上経済的負担が課せられることを恐れて民主政を転覆させたのが寡頭派政変の狙いであった、と結論付けられた。

さて、「コトルノス（日和見主義者）」とあだ名されたテーラメネースは前四一一年の四百人寡頭派政変の首謀者でありながら、わずか四ケ月間の後に四百人政権を自ら打倒し五千人政権を樹立した。この一見信義のない様に見える彼の行動は、いかなる政治理念に由来するものか。テーラメネースの政治の理念像は、クセノフォーンに伝えられている。「自分（テーラメネース）は寡頭派でも民主派でもなく、極端な民主派や極端な寡頭派に対して闘っており、かつては良い政治とは馬か盾によって貢献できる者たちと共に政務を割り当てることであると思っていた」。氏は、この史料に依拠し、テーラメネースは四百人政権打倒に際して、政務を身体と財力で貢献できる者たち即ち重装歩兵たちからなる五千人に委託し政治と軍事のテクノクラートによる権力集中を首尾一貫して主張したのだ、と主張される。

前四〇一年のキュジコス沖の海戦でアテーナイが勝利すると、その年の夏に民衆は民主政を復興した。そして寡頭派政変に関与した者たちは次々と告発されていった。氏は、四百人処罰を前四一一年から一〇年夏までの第一期処罰と前四一〇年以後の第二期処罰の二つに分け、前者については、かつての四百人のメンバー自信による

処罰であったと規定し、それに対して、後者については、かつての四百人の寡頭派政変に係わったテクノクラートたちが寡頭派のレッテルを貼られて、金銭目当ての訴訟家たちの餌食となった処罰とみなされた。アテナイにおける寡頭派政権は長続きはしなかった。結局政治的実験は失敗に終わったのである。

以上の発表に対して、まず宮地氏から、なぜテクノクラートへの権力集中が危機の打開に絡むのか、言い替えると、なぜ民主政では危機を打開することができなかったのか、という古代民主政の限界を問う質問が出された。その質問に対して、氏は、古典的アテーナイの民主政は、国政も外交も裁判も全ての市民によって運営される、言わば素人政治であり、このような政治機構は、緊急な危機に際しては特に、自ずと限界をはらんでいたであろうこと、一方、テーラメネースの一派は政治的軍事的な分野で専門的な技術と能力を備えた者たちであり、彼等は、政治的には民主派にも寡頭派にも属さず、国家の危機を乗り切るための中立的なテクノクラートであったこと、の二点を回答された。以上の質疑応答に対して、志村氏から関連質問として、テクノクラートという概念は、一九世紀から二〇世紀の政治に対して用いられる近代的な概念であるが、それを古代の政治に投影するのは不整合ではないか、また「馬と盾によって貢献できる者たち」による政治とは、テクノクラートという概念を持ち出さなくても、軍事政権の樹立として見做せるのではないか、との意見が出された。これに対して、氏は、確かにテクノクラートという言葉は、近代的概念から便宜的に借用したものであると明言されたが、軍事政権の樹立に関しては、明確な回答が得られなかった。最後に山代氏から、四百人寡頭派は純粋な寡頭主義から生まれたものではなかったという氏の主張に関して、それでは純粋な寡頭主義とは一体いかなるものであったのか、という質問が出された。これに対して、氏は、寡頭派というのは、常に少数者の利益を考える集団であるが、一方、四百人寡頭派は確かに権力においては少数者に集中しているが、しかし、彼等の目的は彼等自身の集団に属する少数者のみの利益を養護することではなく、危機に直面したアテーナイの国家を、言い替えると、多数の市民の利益を養護することにあったのであり、この点が四百人寡頭派が純粋な寡頭主義ではなかったとする所以である、と回答された。

以上、堀井氏の報告の論旨とそれに対する主な質疑応答の概略を整理してみた。最後に、氏の報告に関して評者の若干の感想を二点だけ述べたい。氏の論旨の中心には、言うまでもなくアテーナイ民主政の転覆という歴史的事件が捉えられている。当時のギリシア世界には様々な政治形態が混在していたが、中でもアテーナイの完全民主政はギリシアにおける民主政治の最も進歩したものであり、アテーナイ自らもまたデロス同盟諸市に対して事あるごとに民主政を押しつけていった。そのようなアテーナイ民主政のアテーナイ内部からの崩壊を意味する前四一一年の四百人寡頭派政権の樹立は、アテーナイ政治史に於て特筆に値する事件であった。氏は、この事件の性格付けを、専ら前四一三以降の財政問題との絡みにおいて解釈されたが、果たして、この事件はそれだけで説明し切れるものであろうかという疑問がある。アテーナイの政局において、民主派と寡頭派との対立は前五〇九年のクレイステネース改革以来、キモーン、トゥーキューディデースらの寡頭派とエフィアルテース、ペリクレースらの民主派の対立は伝統的なものであったはずである。また、前四世紀に入ってからも、イソクラテース、プラトーン、アリストテレースなどは、全て民主政に批判的であった。確かに、四百人寡

頭派政権樹立の直接的な原因の一つは、氏の言われる通りだとしても、やはりより大きな視野に立った解釈もまた必要だったのではないだろうか。それからもう一点。氏は、膨大な史料及び年表等をレジメに付され、聞き手に対して懇切丁寧に情報を提供するように勤められている。しかし、しばしば質問にも上ったように、寡頭派、純粋な寡頭派、民主派、テクノクラートといった言葉の概念についてより詳しく説明されていたなら、聞き手にとってより理解しやすかったのではないだろうか。

以上、寡頭政研究の門外漢である評者が報告者の論旨を理解した限りでの論評を試みた。評者自信の浅学による誤解あるいは報告者に対する非礼な点もあったのではないかと些か心許無い。その点に関しては、ただ御寛恕を願う次第である。